

## 教養教育としての「イギリス史文献講読」

齋 藤 泰

### “Reading on the British History” in General Education

Yasushi SAITO

#### はじめに

教養教育として、「イギリス史文献講読」（1期，2単位）を開設し，毎年，全学部2年次学生以上を対象に，英語でイギリス史を読み始めてから，今年度でもう6年目になる。しかも，英語，ドイツ語など教養教育の外国語科目（本学では，「国際言語科目」）の1つとして開講している。この試みは，専門教育では何ら目新しいことではないが，教養教育科目としては，全国でもあまり例を見ない。

この講読は，実際には，さらに5年早くから始めており，1994年，旧教育学部社会教科の専門科目「西洋史講読」の読み替え科目として，総合基礎教育（現，教養基礎教育）に開設した。そのきっかけは，1992年，「大学設置基準の大綱化」に伴って，一般教育の多様化に何らかの形で，率先して対応しようとした試みである。とくに専門教育が教養教育に積極的に関わる仕方として，講義形式の外に，外国語で歴史書を読む「文献講読」も可能ではないか，と思いついて，スタートした。思いついたというよりは，ヨーロッパ史を専門とする教員が専門教育で行っている英語による文献講読を，そのまま教養教育科目に活用しただけである。いや，それどころか，いかなる専門領域であろうと，思い立てば，今すぐにも実施できる科目，それが「文献講読」である。要は，いかに教養教育に前向きに関わるか，教員の姿勢次第なのである。

こうした経緯で，文献講読が教養教育としてスタートしたのであるが，幸い，学生の評価は，後述のように，予想外に高い。もちろん，講読の担当にあたっては，テキスト選びから，講読の進め方あるいは成績評価も含めて，様々な問題が孕んでおり，今後とも改善の余地を少なからず残している。今年度で6年目になるが，総じて，「イギリス史文献講読」はほぼ成功している，と自己評価出来るのではないかと，思っている。

実は，今，大学教育が直面している厳しい現実を考えると，この文献講読の形式での授業開設は，差し迫った打開策の1つとして，予想外に有効ではないか，とささやかな経験から思っている。教員にとっても，学生にとっても望ましい授業形態ではないだろうか。もちろん，専門教育，教養教育を問わず，である。これから少しでも多くの大学で，とくに教養教育として文献講読を開設することになれば，大学教育にいかにプラスになるか，これが，本稿で声を大にして強調したい主題なのであるが，そのために，今，実際に行っている「イギリス史文献講読」の狙いと進め方を詳細に述べ，さらに，この授業に対する学生の授業評価の結果を，過去に遡って，公表し，この文献講読の中身をありのままに紹介しよう。その上で，教養教育を含めて，「文献講読」の開設を改めて提言したい，と思う。

いずれにせよ，肝心なのは，文献講読を積極的に開設し，しかも毎年，めげずにそれを続けるこ

とである。開講し続けながら、問題点を洗い出し、改善策を探り、そして文献講読の効用を少しでも確認するほうが、より実際的ではないだろうか。

### 1. 文献講読の狙い

6年前、教養教育の外国語科目（「国際言語科目」）の中に〔文献講読〕を設定し、英語による「イギリス史文献講読」を初めて開設したが、当初、教養教育としては、長年担当してきた講義形式の「ヨーロッパ史」を、前期、後期に二つ開設することも考えた。しかし、教養教育にも多様な参入の仕方もあり得るのではないかと考え、従来通り講義は1つだけに止め、その代わり、専門教育で長年実施してきた「ヨーロッパ史文献講読（英語）」を全学向けにオープンにすることに決めた。実は、英語のみならず、専門教育として数年前からスタートしたフランス語、ドイツ語による「ヨーロッパ史文献講読」も考えたが、専門科目との「読み替え」は認められない、という予想もしない壁にぶつかり、やむなく英語だけに止めた。専門科目と柔軟に読み替え出来るなら、即座に実施出来るが、そうでないと、多分に超加重負担となるので、思いとどまった。

こうしてスタートした「イギリス史文献講読」の狙いは、次の2つである。「**英語で歴史書を読もう！**」イギリス人が自国の歴史をいかに理解し、叙述しているか、を知るために、イギリス人が書いた概説書を学生と読む。その場合、翻訳や、訳注付きの大学テキストは避ける。イギリス本国で公刊されたもので、しかも出来るだけ新しい概説書を読む。「ブリテン史」あるいは「ブリテン諸島史」としてのイギリス史の新しい傾向を学生に知らせるためである。同時に、イギリス史叙述の核心に触れさせることも大事で、ほとんどの歴史書には、必ずと言っていいほど、政治と宗教、とくにキリスト教の関係を叙述の基本視点としている。キリスト教以前のケルトやゲルマンの神々も含めて、政治と宗教との係わり合いから、古代中世の歴史を読み取ると、イギリス史が分かりやすくなるだけでなく、一層面白くなる。これは、とても大事だが、日本史の概説書や翻訳書では、ややもすると、見落としがちな視点である。この基本視点を少しでも感じ取らせたら、この文献講読は成功した、と言ってよいだろう。

さらに、もう1つの狙いは、「**一字一句も疎かにせず、英語の精読に徹しよう！**」という読み方である。どんな文献を読もうとも、正確に読み取らないことには始まらない。外国語科目と位置づけられるからではないが、一字一句たりとも疎かにせず、また、文法も的確に押さえながら、厳密に読む。こうして、はじめてイギリス史を正しく理解することになるのであって、大意を掴むだけとか、雰囲気ですすめといった、学生が往々にして陥りがちな安易な読み方を決して許さない。同時に、他の学生の訳読にも熱心に耳を傾けるように指導する。訳の分担が済んだら、それで終わりとしてせず、他の学生の訳読や、教員との質疑応答をも注意深く聞き取り、内容理解の一助にする。時には、各学生の読解力の差異を感じるなり、優越感を感じるなりして、学生同士の切磋琢磨の好機にもなるだろう。

こうした2つの狙いを定めて、シラバスの「授業の目的及び到達目標」には、次のように記している。

「目的：イギリスの歴史書を読む。イギリス人が自国の歴史をいかに理解し、叙述しているか、辞書と世界史教科書を参考にしながら、原書を読む。イギリス人が書いた最新の概説書を読んで、歴史の見方あるいは日本の歴史の描き方の参考にし、また、イギリス史の面白さを知る。」

「到達目標：英文を忠実に訳して、イギリス人の歴史の理解の仕方を学ぶ。日本語ではなく、英語で歴史を理解すること、同時に英語の読み方を習得させることが、到達目標である。」

毎年、このような「目的と到達目標」を立てて、「文献講読」を開始し、回を重ねるにつれて、次第に学生はイギリスの歴史へ興味を持つようになる。日本語で読むのとは趣を異にした良さを少しでも会得すれば、それでよい。いわゆる「原書を読む」大切さである。そして、イギリスの歴史叙述に直に接する機会となり、ここから、日本人の発想とは異なる歴史理解なり、ものの考え方を少しでも感じ取るようになれば、「文献講読」の狙いはほぼ達成されたことになる。英語による文献講読は、全国の大学で一般に行われているが、それを教養教育科目として開設するのも十分可能である。学生の読解力とか、半年で読む分量の少な

さを考えて、その実施に踏み込めない気持ちも分らないではないが、そこは一步踏ん張って、英語による専門分野の文献講読の開設を強く推奨する。そして、シラバスの「カリキュラム上の位置付け」に、「英語の『外国語活用法』の科目と関連させて、外国語習得にも活用出来る」と明記しているように、「英語リーディング」の1つとして、十分英語学習能力を高める科目にもなりうる。

## 2. テキスト、授業の進め方と成績評価

### I. テキスト

これまで、「イギリス史文献講読」で取り上げたテキストは、下記のイギリス史概説書である。

- J. Black, A History of the British Isles. London 1996.
- D. McDowall, An Illustrated History of Britain. Essex 1998.
- J. Randle, Understanding Britain. A History of the British People and their Culture. Oxford 1981.
- F. E. Halliday, A Concise History of England from Stonehenge to the Atomic Age. London 1983.
- V. E. Chancellor, Medieval and Tudor Britain. London 1983.
- R. Strong, The Story of Britain. London 1996.

イギリス史の概説書は数え切れないほどあるが、学生の理解度を考慮して、難解な文体とか、あまり精緻な概説書は極力避けた。そして、出来るだけ新しいものを選ぶようにしている。それは、単に新刊という単純な理由からではなく、「ブリテン史」の新しい潮流を現しているからである。そもそもイギリス史は、本国では、「ブリテン史」と呼称されているのが一般的で、近年、本来の意味での「ブリテン史」への視点が重視される傾向にある。ブリテン史とは、イングランド、ウェールズ、スコットランドそして（北）アイルランドからなる連合王国史＝ブリテン諸島史という発想である。従来のイギリス史ではなく、「ブリテン史」という的確な理解と共に、可能な限りイギリス史の新傾向を学生に知らせるのも、「文献講読」の重要な目標である。この点でも、これまで読んだテキストは、最良のテキストであって、学生には繰り返しその斬新さを訴え続けてきた。さらに

画像や地図入りの概説書を好んで選ぶようにする。学生の知的関心を大いに引きつけるからである。ただ、それでも不十分なので、可能な限り、絵、地図あるいは家系図を載せた補助プリントを独自に作成して、配布する。そうすると、適切な訳読の助けになる。また、時折、「ブリテン史跡めぐり」の特製ビデオを活用するのも忘れない。

1学期、15回の授業で、テキストを読むとなると、分量的にかなり限られてくるのは、やむを得ない。主にイギリス中世史を取り上げ、しかもノルマン征服（1066年）から百年戦争前半期（1337—1360年）までとか、百年戦争後半期（1415—1453年）からバラ戦争（1455—1485年）までを、2年間亘って読んだこともある。あるいはアングロ＝サクソン時代（449—1066年）から始めるとか、中世末期からテューダー朝のエリザベス1世治世（1558—1603年）までを重点的に読んだ。

### II. 授業の進め方

このように、かなり限られた短い時代ではあるが、イギリス史の概説書を読み、また出来るだけ新しいテキストに直接触れることは、単にイギリス史の知識を増やすだけでなく、既成のイギリス像から抜け出し、新しい的確なイギリス史理解にも通じる。そうした狙いが「イギリス史文献講読」に込められており、そのくらいの目標を設定しないでは、退屈な「語学の時間」になりかねない。

ただ、それで済まされないのは、学生の姿勢である。易きに流れるのに抗しきれず、学生には積極性に欠けるのが目立つ。これには正直苦慮しているが、毎回必ず出席を取ると、小刻みに訳読の分担をあらかじめ決めることで、強制的に出席を義務づけている。その代わり、分担訳の訂正、補充は、常に懇切丁寧を心がけている。分担箇所については、後に何ら疑問を残さないように、微に入り細に入り学生と訳を確認し合い、学生が納得出来るまで最大限に説明に努める。こうして、丁寧に読まなければならないこと、そして、こうした読み方を地道に積み重ねることによって、初めて読んでいるコンテンツ、つまりイギリス史への理解が自ずと深まることを、学生自身に実感させる。それ故、めげずにこの姿勢を貫くことである。

「授業の進め方」として、シラバスには、次の

ような事項を明記しておく。

- ・プリントしたテキストを配布し、分担を割り当て、内容・文法とも、精確に訳す。
- ・外国語教育の効果的な実践のために、受講者数は、最高20名までが望ましい。
- ・毎回、出席を取り、授業に出席することを、最低限の義務とする。
- ・英語の苦手な者は、読解にかなり苦勞することになるので、遠慮願う。
- ・辞書を引きながら、イギリスの歴史を丹念に読むことを通して、イギリス史の理解が深まるだけでなく、英語読解力も身に付く。
- ・受講することを決めた学生は、15回休まず、出席すること。なお、休講なし。
- ・この授業のキャッチフレーズは、「**英語で歴史書を読もう!**」。

授業初回のガイダンスでも、以上の事項をアナウンスし、周知徹底を図る。とくに外国語の効果的な学習を目指すので、小人数クラスを堅持する。演習科目としては、その規模、最大20名が限度である。この前後は許容するとして、これ以上は無理なので、初回に出席した学生を受講者として優先し、受講手続き締め切り前でも、20名を少し越えるなら、他の科目を受講するように指導している。幸い、これまで、多くて25名に留まっており、学生一人一人に行き届いた説明が出来る人数であった。

毎回、面倒でも学生に訳分担を割り当て、英文を忠実に訳しながら、授業を進めている。前もって分担しても、学生の予習が十分ではない時がしばしばある。学生の読解に対する姿勢が明らかに安易である。受験英語をパスしてきているから、真剣に取り組めば、難なく訳読出来るのが、どうもスムーズにいかない。そこで、「精読」に徹するように、口うるさく言うだけでなく、学生が訳したのを再度確認し、あるいは補正しながら、私自ら「精読」の実例を示す。もちろん、コンテンツに関わる歴史的背景や歴史事項(地名、人名、テクニカル・ターム)については、惜しみなく情報を提供し、的はずれな歴史解釈にならないようにする。そして、文法的な理解も徹底して疎かにせず、終始一貫、厳密に読む手法を貫く。

こうした読み方に徹するために、学生にいつも戒めているのは、次の7点である。

- 辞書を引こう。**予習でも、授業でも、辞書を何度も引くことを厭わない。もっとも、年々、電子辞書の普及が目覚ましく、今や「辞書を引く」のではなく、「単語検索」になりつつある。ともかく、どんな単語でも、成句でも、必ず辞書に目を通して、確かめるなり、新発見するなりして、辞書の最大限の活用を促す。どんなことがあっても、引いた単語の最初の意味で済ます悪しき習慣だけは避けるように指導する。“fine”(罰金)、“fair”(市場)、“bill”(法案)、“act”(法令)、“course”(大義)、“try”(裁判する)などは、辞書を丹念に引ないと、確実に誤訳する。
- 主語、動詞から読む。**リーディングであるから、主語から訳すのが、鉄則である。目的語を押さえながら、動詞の意味を前後に即して訳す。雰囲気訳すとか、印象主義的な読み方をする学生に限って、主語、動詞を疎かにする傾向が見られる。だから、意識ではなく、文字通りの逐語訳をするように繰り返し促す。
- 代名詞と時制に気を付けよ。**人称代名詞は誰で、指示代名詞が何であるか、を的確に把握し、それに言い換えて訳すことを常に習慣づける。また、歴史の文献であるから、このほか時制には煩く注意する。過去完了と過去から、前後関係あるいは因果関係を正しく読み取ることが、肝心だ。
- 前置詞を活かせ。**文脈に沿った前置詞の多様な意味を探し出し、また、動詞や名詞とのつながりで、前置詞の適訳を見つけることが、大事だ。“over”の多義性、“of”を主格や目的格として使う用法に要注意。たかが前置詞ぐらいで、と侮るなかれ。
- 関係代名詞はとても便利。**因果関係から補足説明まで、これほど便利な叙述法はない。歴史書や他の人文・社会科学文献では、必ずといってほど頻出する便利な叙述スタイルである。また、“of whom”、“of which”の訳し方を苦手とする学生も少なくないから、この弱点から早く抜け出すように、文構成を分解して、納得出来るまで念入りに指導する。
- コロンとセミコロンを区別せよ。**英語を含む欧米言語では、コロン(:)とセミコロン(;)が頻繁に、しかも鮮やかに使われている。正

確に読むにはとても大事である。コロンが「すなわち」と訳すのは、ほぼ定着しているが、セミコロンへの学生の注意は今1つである。セミコロンは、かなり重要で、かつ難しい。人名、地名や事項を並記するだけでなく、文節を結ぶものとして、“and”, “but”, “because”をはじめ、実に様々な接続詞の働きをしている。前後の文脈から適訳を選ぶ他ない。どんなことがあっても、コロンと同じと見なしたり、ましてや無視してはいけない。

○**仮定法過去に注意せよ。**過去の事実の否定という紋切り型の解釈ではなく、登場人物の考えや願望だったり、あるいは著者の主張や推測を表現する、英文叙述には欠かせないものである。史実ではなく、いわば1つの歴史解釈である点を、歴史書を通して具体的に感じ取らせる。同時に、こうした実際的な用例から、逆に仮定法とは何か、を学生が再認識するよい機会ともなる。

こうした基本的な読み方に注意すれば、あとは学生の知的好奇心と熱意だけである。繰り返しになるが、「一字一句疎かにしないで」読むことである。

### III. 成績評価

成績評価については、講義形式もそうだが、特に文献講読など演習形態では、毎回、学生が出席し、授業に参加しているなら、それだけでも十分に評価に価する、と考えている。それに、割り当ての訳読を、文法・内容的にも正確に行えば、評価に問題はない。シラバスに「出席率(50%)、分担訳(50%)を総合して、評価する」とある通りである。それだけに、出欠は厳しくチェックする。正当な理由なしには、欠席は認めない。止むを得ず欠席する際には、メールで連絡することと、頻繁に順番が回ってくる分担訳を、必ず添付ファイルかメールで事前に送信することを、モラルとして義務づける。さらには、連続3回、あるいは通算4回以上の欠席者には、評価がダウンするどころか、単位認定できないこともありうることを、ガイダンスではっきりと言明する。もちろん遅刻も厳禁とする。ともかく、受講すると決めたら、「毎回、教室に出て来なさい」と、再三うるさく厳命する。そうすれば、「必ず、得るものがある

表1 受講者数・成績分布

年度	受講者数	成績評価区分			
		A	B	C	D
1999	7	3	0	4	0
2000	12	6	5	1	0
2001	11	10	1	0	0
2002	17	11	6	0	0
2003	25	18	4	3	0
2004	22	15	6	1	0

から」と諭す。

ガイダンスを除く14回、毎時間、初めから最後まで、訳読中心に授業を行い、試験もレポートも一切課さない。成績評価は、出席点とともに、専ら分担訳の完成度だけである。過去6年間の成績分布は、表1である。かなり甘い評価をしていることになるが、授業の基本条件を満たす限りは、このような成績分布でも一向に構わない。出席を重視しているので、Dの判定はない。そもそも授業の狙いも進め方も多様なので、成績評価は一律に出来ない。成績評価も重要であろうが、それより実際の授業で、いかに学生が授業内容に関心を抱き、その理解を深めるようにするかが、教員の最大の務めではないか、と常日頃から思っている。

### 3. 学生による授業評価

#### I. 1999年度～2002年度授業評価

それでは、「イギリス史文献講読」を、学生はどのように受け止め、評価を下しているのだろうか。この講読がスタートした1999年度から今年度まで実施された「授業アンケート」を公表し、若干のコメントを加えたい。質問形式が2003年度から大幅に変わったので、大きく2つに区分して、詳細に見ていきたい。表2～4は、1999年～2002年度で、全部で25の質問のうち18問を取り上げ、これまた3区分して、公表する。

①**学生の対応** 6つの質問に対して、まず、この授業を選択した理由である。どの授業でも言えるように、学生は、ほとんどシラバスを見て選択しているが、複数回答なので、その他の理由をみると、専門との関連より、一般教養として「文献講読」を選択している学生が少なくない。文字通り文献講読の目標に沿う。出席については、演習形式なので、毎回、出席を取るのには、シラバスに

表2 学生の対応 (%)

	1999年 (7人)	2000年 (11人)	2001年 (11人)	2002年 (17人)
問1 この授業を選択した理由は何ですか。(3つ以内) シラバスを見て 専門との関連で 一般教養として	85.57 57.14 0.00	72.73 9.09 54.55	100.00 0.00 45.45	76.47 5.88 64.71
問6 あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか。 9割以上 9割未満～7割以上	100.00 0.00	90.91 9.09	90.91 9.09	82.35 17.65
問7 あなたの授業態度はよかった。 そう思う どちらかといえばそう思う	42.86 57.14	63.64 36.37	63.64 27.27	41.18 52.94
問8 あなたはこの授業に意欲的に取り組んだ。 そう思う どちらかといえばそう思う	42.86 57.14	45.45 54.55	54.55 45.45	58.82 35.29
問9 講義内容について質問や発言をした。 そう思う どちらかといえばそう思う どちらかといえばそう思わない そうは思わない	14.29 14.29 71.43 0.00	18.18 36.36 9.09 27.27	27.27 27.27 18.18 9.09	11.76 29.41 17.65 17.65
問10 講義内容について質問や発言をしたかった。 そう思う どちらかといえばそう思う どちらかといえばそう思わない	14.29 28.57 14.29	9.09 38.36 9.09	18.18 45.45 9.09	29.41 23.54 5.88

も必ず明記しているし、また、授業開始のガイダンスでも、受講条件として周知徹底している。高い出席率が、総じて良い授業態度や意欲的な学生の取り組みとかなり連動しているのは読み取れるが、それでも、問7～8での解答「そう思う」が5割前後なのは、少し気になる。学生の意欲を引き出すには、出席を義務づけるだけでは済まないようだ。学生参加型の授業を目指しているだけに、一層工夫することが求められる。これには、学生の「質問や発言」に関する問9、10の解答率にも現れている。講義形式ではないし、また、幸い、受講学生は20名前後なので、学生に問いかけ易いし、また、実際、訳読も含めて、学生に発言させながら、講読を進めているつもりだが、それでも、「発言したかった」の学生の声は無視できない。内容についての質問や発言をしたとの結果も含めて、「講義内容の質問や発言」する機会を一層学生に与えるよう、常に心に留めておきたい。

②学生の授業評価 それでは、この講読に対する学生の評価はどうであろう。これに該当する、と思われる問を8つ取り上げた。この中で、主題・テーマが明確である(問11)、教員の熱意(問17)、

教員の話し方(問18)が、ほぼ毎年、高率である。「そう思う」が、年度は異なるが、6箇所ですべて何と100%に達している。問11と問17では2度も、また問18と問21は、それぞれ1回、「そう思う」が100%であった。これには驚きと共に、努力の甲斐があった、と大いに納得する。学生がよく見てくれている、と改めて思う。それだけに気を引き締めて努力を重ねたい、と思う。これほどの高率ではないが、「授業の体系性」、「よく準備されていた」、「内容を分かり易くする工夫」、「話し方がよかった」の質問にも、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を加えると、いずれも100%近くになっているのは、教育方法の改善に鋭意努めている者としては、嬉しい限りである。このような高い評価を受けると、学生の期待を裏切らないよう、鋭意努力する気持を奮い立たせる。問19「学生の質問にも明快な回答を与えた」が高い割合なのは、訳読中心の授業では、これもまた当然だ。すでに授業の進め方でも述べたように、どんな些細なことで、どんな疑問にも即座に答え、学生の曖昧さを払拭するように、いつも注意している。その理解の有効な手段としても、補助プリ

表3 学生の授業評価 (%)

	1999年 (7人)	2000年 (11人)	2001年 (11人)	2002年 (17人)
問11 この授業は主題・テーマが明確であった。 そう思う どちらかといえばそう思う	100.00 0.00	72.73 27.27	72.73 27.27	100.00 0.00
問12 この授業は体系的であった。 そう思う。 どちらかといえばそう思う	57.14 42.86	54.55 18.18	72.73 18.18	70.59 23.53
問13 この授業はよく準備されていた。 そう思う どちらかといえばそう思う	85.71 14.29	72.73 27.27	90.91 9.09	70.59 17.65
問14 この授業は内容を分かりやすくする工夫が感じられた。 そう思う どちらかといえばそう思う	71.43 14.29	54.55 27.27	63.64 27.27	52.94 17.65
問17 この授業は教員の熱意が感じられた。 そう思う どちらかといえばそう思う	100.00 0.00	90.91 9.09	100.00 0.00	82.35 11.76
問18 教員の話し方(速さ・声の大きさ・明瞭性)はよかった。 そう思う どちらかといえばそう思う	100.00 0.00	63.64 18.18	90.91 9.09	70.59 17.65
問19 この授業では学生の質問にも明快な回答を与えた。 そう思う どちらかといえばそう思う	71.43 14.29	54.55 18.18	90.91 9.09	58.82 17.65
問21 この授業はテキストやプリントなどを効果的に使用した。 そう思う どちらかといえばそう思う	85.71 14.29	63.64 36.36	100.00 0.00	88.24 5.88

表4 学生の総合評価 (%)

	1999年 (7人)	2000年 (11人)	2001年 (11人)	2002年 (17人)
問20 この授業には学生も効果的に参加することができた。 そう思う どちらかといえばそう思う	71.43 28.57	72.73 18.18	100.00 0.00	70.59 17.65
問23 受講後、この科目に対する興味が増加した。 そう思う どちらかといえばそう思う	57.14 28.57	54.55 18.18	72.73 18.18	52.94 23.53
問24 受講した価値があった。 そう思う どちらかといえばそう思う	100.00 0.00	72.73 18.18	100.00 0.00	88.24 5.88
問25 私の出席状況や授業に対する姿勢から考えると、この授業を正當に評価できる自信がある。 そう思う どちらかといえばそう思う	85.71 14.29	63.64 27.27	81.82 9.09	76.47 11.76

ントを効果的に使用している。歴史地図や会戦図、家系図あるいは歴代のイギリス国王の肖像などを掲載したプリントを配り、テキストと併用して、理解を深めるようにする。こうした資料は、訳読に役立つだけでなく、歴史への興味を触発するの

で、学生には好評である。また、テキストとして、イギリスで出版された歴史書をコピーで配布している。「テキストやプリントなどを効果的に使用した」(問21)通りである。

③学生の総合評価 総合評価の結果はどうであ

ろうか。次の4つの問を選んだ。4問とも、学生にはかなり好評である。学生が効果的に参加できた(問20)の高率には何によりも安心する。学生の主体的な姿勢を授業で引き出すことに成功したことになる。今、求められている、いわゆる「学生参加型」授業の実例と言ってよいであろう。また、受講して興味が増した(問23)、受講した価値があった(問24)そして授業を正當に評価できる(問25)という、最も気になる評価が、これまた高い割合を占めている。この総合評価からは、この講読が成功している、と言っても言い過ぎではない。

## II. 2003年度～2004年度授業評価

こうした授業評価が、ここ2年間では、どうなっているのだろうか。2002年度までとは、質問項目も形式も大幅に変わったので、2003年度と今年度の「授業評価調査書」の結果を、表5の通り、そのまま全部公表することにする。質問項目は7つに絞られ、各項目の選択肢は6つに増えている。また、評価の結果として、質問項目ごとの平均点が出ているのが、とくに目新しい。

回答学生は、2003年度は24名、2004年度は21名で、いずれも教育文化学部2、3年次学生である。質問項目1,2,6は、いずれも平均点4.48から4.83と、高い評価を受けている。ただ、質問事項4,5,6が、2003年度4.33 4.38 4.46だったのが、2004年度には、3.86以下に明らかにダウンしているのが気になる。先の1,2,6の平均点が、今年度少しだけ減少しているのは許されるとしても、全体的に今年度の評価の方が厳しい。右のIII. 学生の感想を読む限りでは、かなり満足度を満たしている、と思われるが、十分に検討の余地がある。これにはテキストの難易度も微妙に関係しているので、なかなか難しい。実際、昨年度は、少し易しいテキストであった。それでも、今年度の「授業の方法、進め方」、「理解度に応じて進める」や、「授業の内容が十分に身に付いたか」の評価をみると、昨年度より減っているとはいえ、3.50前後の平均点であるのは、かなり成功した授業だ、と言えるのではないだろうか。

授業評価調査書の「自由意見欄」(無記名)には、次のような意見が見られる。2003年度では、「とてもおもしろかった」、「教官の熱意がものす

ごく伝わってくる授業で、楽しかった」、「説明はわかりやすかったが、板書はわかりにくい」。2004年度は次のような意見である。「目的・到達目標はとても明らかで、先生の意欲がとても伝わってきて、やる気にさせる授業でした」、「本学では珍しいくらい活気のある教員で、他の授業に対していいアクセントになった」、「イギリス史について、とてもいい勉強になり、よかった」、「充実した授業だった」。そして、次の2つの意見は、教養教育と専門教育との密接な連携を学生側も強く望んでいることを、十分に窺わせる。「英語の文章を読む機会を得られたうえ、イギリス史について学習できてよかった。教養基礎教育の科目というより、英語科の専門科目に設定すれば、いいのではないか、と思う」、「教養基礎科目としてではなく、専門科目として開いてほしい。学校教育の英語科の専門科目として設定してほしい。英語のスキルが見につくと思うので」。

## III. 学生の感想(2004年度)

それでは、多くの学生は、実際に受講してみて、この講読の狙いや進め方について、どのように見ているのだろうか。学生の最新の声に耳を傾けたく、今年度受講した学生に、15回目の最後の授業終了直前、記名で「授業の感想」を書かせた。学生はどのように見ているのだろうか、が学生の発言から客観的に読み取れる。また、反省点も大いに引き出せる。

★イギリスの歴史に加え、英文の読み方のスキルが身についた。重要な文法や単語をピックアップして、説明してくれたので、ライティングの助けにもなった。また、単語の説明では、「この単語には、こんな意味もあるのか!」という驚きがあり、単語の意味の深さを感じ、いつも辞書の一番上の意味しか覚えていなかったのが、文脈にあった、より自然な意味を選ぶことの大切さを知った。この文献のレベルは、ちょうどよかった、と思う。やり残した部分があるのが気になるので、通年になればいいな、と思った。

★イギリス史を英語で読む、という機会は、私にとって滅多にあることではないので、よかった。歴史の背景に関する知識がほとんどなかったのが、理解するのが少し難しかったけれど、



表5 2003/2004年度の授業評価

	2003年度 (24名)		2004年度 (21名)	
	回答件数	%	回答件数	%
<b>質問項目1 授業の目的や到達目標は明示されていましたか。</b>				
5 そう思う	21	87.50	13	61.90
4 どちらかといえばそう思う	2	8.33	5	23.81
3 どちらともいえない	1	4.17	3	14.29
平均点	4.83		4.48	
<b>質問項目2 教材はよく準備されていましたか。</b>				
5 そう思う	20	83.83	15	71.43
4 どちらかといえばそう思う	3	12.50	6	28.57
3 どちらともいえない	1	4.17	0	0.00
平均点	4.79		4.71	
<b>質問項目3 説明や板書は、明確で十分に分かりやすいものでしたか。</b>				
5 そう思う	9	37.50	2	9.52
4 どちらかといえばそう思う	9	37.50	12	57.14
3 どちらともいえない	3	12.50	3	14.29
2 どちらかといえばそう思わない	2	8.33	3	14.29
1 そう思わない	0	0.00	1	4.76
0 分からない、または該当しない	1	4.17	0	0.00
平均点	3.92		3.52	
<b>質問項目4 授業の方法、進め方は、興味関心・学習意欲をそそるものでしたか。</b>				
5 そう思う	12	50.00	7	33.33
4 どちらかといえばそう思う	9	37.50	8	38.10
3 どちらともいえない	2	8.33	3	14.29
2 どちらかといえばそう思わない	1	4.17	2	9.52
1 そう思わない	0	0.00	1	4.76
平均点	4.33		3.86	
<b>質問項目5 授業はあなたの理解度に応じて進められていると思えますか。</b>				
5 そう思う	14	58.33	3	14.29
4 どちらかといえばそう思う	6	25.00	9	42.86
3 どちらともいえない	3	12.50	3	14.29
2 どちらかといえばそう思わない	1	4.17	4	19.05
1 そう思わない	0	0.00	1	4.76
0 分からない、または該当しない	0	0.00	1	4.76
平均点	4.38		3.29	
<b>質問項目6 授業の内容が十分に身に付きましたか。</b>				
5 そう思う	13	54.17	4	19.05
4 どちらかといえばそう思う	9	37.50	10	47.62
3 どちらともいえない	2	8.33	4	19.05
2 どちらかといえばそう思わない	0	0.00	1	4.76
1 そう思わない	0	0.00	2	9.52
平均点	4.46		3.62	
<b>質問項目7 授業の予習・復習(課題・問題演習等)の指示が適切に行われていましたか。</b>				
5 そう思う	19	79.17	14	66.67
4 どちらかといえばそう思う	5	20.83	5	23.81
3 どちらともいえない	0	0.00	2	9.52
平均点	4.79		4.57	

これからもう一度読み返して、理解を深められるようにしたい、と思っている。分かりにくい文法や知らなかった単語にもいっぱい触れたので、自分の力をアップさせられるようにがんばりたい。

★英語を正確に1つ1つ訳す、というのは、適当にごまかすことができないので、難しい面もあった。しかし、1つ1つゆっくりでも訳すことで、内容をより良く理解できたし、日本語との表現のしかた、発想の違いを認識できた。また、何度も出てきた言葉、“was to”や、“for”等々、今まで曖昧にしていたものも、何度も訳すことで、うまく訳せるようになったのはとても良かった、と思う。

★以前から歴史には関心があったので、分担以外のところも興味をもって訳すことができて良かった、と思う。長文読解には苦手意識があったが、この授業を受けたことで、少しは自信が持てるようになった気がする。テキストに関しては、著者は、本当に“for”が多い、と感じた。お陰で、今度は“for”がでてきたら、迷わず訳せそうな気がする。歴史に関心があるといっても、ヨーロッパの歴史にはあまり興味がなかったが、本文を読んで、イングランドの歴史も複雑で、実におもしろい、と感じた。

★この授業で、英語の力がただだけでなく、イギリス史のノルマン・コンクエストのあたりを世界史で習ったよりずっとくわしく知ることができてよかったです。話の内容もおもしろかった。

★英文の和訳が大変だったけど、イギリスの歴史を英文を通して知ることができて、とても良い授業でした。また、この授業は、自分がイギリスに興味を持つきっかけになった、と思います。

★この文献講読を受講して感じたことは、まず、文法に沿った英文の訳し方をよく学ぶことができた、と思う。この授業の目的はかなりよく達成された、と思う。少人数の授業は、多人数でやるよりも、だらだらせず、先生の目もゆき届いてよい、と思った。ただ1つ、英文を訳しながら、正しい発音も学びたかった。

★予習の時点で正確に訳すのは、大変でしたが、

この授業を通して、文を細かく、正確に訳して読むことの重要さが分かりました。また、この授業に対する先生の熱意が伝わってきて良かった、と思います。楽しくイギリス史を読むことができました。

★この授業は、目的や、自分がやるべきことが、はっきり見えていて、集中して授業に取り組むことができました。他の授業では、英文の読み方を、このように細かく、正確さにこだわって読むことがなかったのに、辞書をよく見て、知識を深めることができたので、やりがいがあった。先生も熱心に、厳しく教えて下さったので、これからは私も英語をこだわって訳したい、と思った。通年にした方が、もっと歴史についてもくわしく学べる、と思う。

★教材が、きちんと文法や単語を調べればわかる、わかりやすい英文なのがとてもよかったです（現代英語や用語を使った、とてもやりにくい英文を使った授業を受けたことがあるので、なおさらでした）。一人一人の訳に丁寧に解説をつけてくれたこと、授業をはじめの時に、到達目標や評価方法などをはっきり言ってくれたことがよく、予習などやるべきことがよくわかり、厳しすぎず、楽しすぎない授業でよかった、と思います。

★今まで英語は結構いいかげんに訳していたので、正確に訳するのは大変だった。正確さを求めると、英単語にある複数の意味の可能性を考えることになるので、英単語への理解が進んだ、と思う。英単語は英語の基礎であるから、その理解は英語の理解への第一歩である。少しではあるが、イギリス史も学べて良かった。

★とても面白かった。補足説明も分かりやすく、世界史の予備知識がほとんどなかったが、すんなりと入り込むことができた。進行の度合いが少し半端になってしまったが、それは個々の予習によるものと思われる。人数の方は、このくらいで丁度いい、と思う。これ以上増えると、一人当たりの分量が減って、英語力が身に付くのが怪しくなるので。

★最初は訳していくのが大変だったけど、慣れて来たら、楽しくなって来た。続きができないのが、とても残念だ。毎回、とても充実し

ている時間だった。英語で文献を読むことは、これからも続けていきたい、と思う。いつかイギリスに行きたい、と思った。

★結構、訳すのに苦労したけど、とてもいい勉強になった。先生のイギリス史や英語についての話もとても興味を持つ話だったので、授業が楽しみだった。もっと時間があつたらな、と思うくらいだった。半年間ありがとうございました。

★内容は難しかったが、とても身になる授業だった。これを通して、イギリスという国に興味を持つことが出来たので、これからも学んでいきたい。

★この授業によって、英語を文法通りに読んでいくことの大事さを学べた、と思います。

★毎回、学生に英文を訳させることは非常に良い、と思う。学生側もひまなく受講できた、と思う。ただ、イギリス史の内容をもう少し詳しく知りたかった。

★実際にイギリスで出版された本で勉強出来たのがよかった。ただ、みんな自分の担当しか読んでいない、と思うので、他のところも読んでくれるような工夫があればいい、と思います。

以上のような学生の率直な感想から、学生がかなり満足していること、さらには、この文献講読に期待していることが、確実に読み取れた。

### おわりに—1つの提言

それでは、なぜ、こうも教養教育における「文献講読」にこだわりを持っているか。この講読を開設し、続けることは、大学教育にいかなる役割を果たすことになるのか。もちろん、何ら目新しさを売りにしているわけではなく、それは、今、内外からの厳しい大学評価に晒されて、大学教育に突きつけられている、次の3つの厳しい現実からである。いずれも今すぐにでも対処すべき緊急の課題といってよい。

第1は、クラス少人数化による外国語教育の改善である。まず、今、早急に取りかかるべきは、外国語教育におけるクラス規模の適正化であろう。かつては、40名クラスを基準にしていたようだが、いまだに1クラス50名とか、最悪なのは、80名の過大規模のクラスがある、という憂うべき現実

を耳にする。外国語担当教員の決定的不足によるとはいえ、これでは外国語教育どころか、そもそも授業そのものが成り立たない。学生に対するきめ細かな指導を考えると、外国語教育の望ましいクラス人数は、多くても20名を越えないことである。この人数で、はじめて学生の習熟度を把握出来るし、懇切丁寧な指導も可能である。また、間違いなく、学生も自ら授業に参加している、という実感が湧く。

このような20名規模のクラス編成の実現となると、英語による外国語教育科目のコマ数は相当な数になり、とても外国語担当教員だけでは応じ切れないのは当然であろう。これに対しては、専門教育から外国語教育に積極的に参入したら、かなりのコマ数を埋めることが出来るのではないだろうか。いかなる学部であれ、専門分野であれ、大学に籍を置く教員は、必ず1コマ持つことである。そして、この際、その授業形態として十分考えられるのが、専門分野からの「文献講読」なのである。それは、講義形態での「教養教育科目」のいわば「文献講読」版と言ってもよい。「イギリス史文献講読」は、その1例である。

第2は、このことを積極的に推進するためにも、専門教育と教養教育の一層の密接な連携が不可欠である。単に専門教育の教養教育へ参入するだけでなく、4年間の一貫した大学教育の体系性を目標として、外国語教育を進めることである。具体的には、いかなる学問領域であろうとも、全学的に外国語教育に関わることである。すなわち、単なる教養教育においてのみならず、専門教育の教員も、その専門教育の中に外国語教育を主体的に担うことである。英語英文学やヨーロッパ史では不可欠な科目である「文献講読」を、多くの分野の専門科目として、数多く開設することが強く望まれる。

そして、第3に、さらに深刻なのは、大学における歴史学、とりわけヨーロッパ史分野の存亡の危機に晒されている現状である。長い伝統ある文学部では、その心配はないだろうが、近年、多くの大学の人文系学部あるいは旧教員養成系学部から、ヨーロッパ史専攻の教員が消えつつある。改組あるいは転出・定年退職後、補充されないか、あるいは歴史学以外の分野でポストが埋められている。これは由々しきことである。この厳しい現

実において、ヨーロッパ史分野の生き残りを考えるとき、専門教育におけるカリキュラムの改善が一層求められよう。のみならず、教養教育への積極的な参加も欠かせない。もちろん、その際、自己の専門分野を最大限に活かす仕方で、多様な科目を開設することが、これまた望まれる。そうした科目として、「文献講読」をスタートさせることである。やや我田引水の印象を与えるのは否めないが、歴史学、とりわけヨーロッパ史の生き残りを考えた場合、1つの有効な方法ではなかろうか。その際、英語による文献講読のみならず、フランス語やドイツ語など、非英語による「文献講読」も十分に可能であるのは、言うまでもない。

以上のように、教養教育も専門教育も含めて、「文献講読」を多くの大学で積極的に開設することを、ささやかな日常的な実践例に基づいて、改めて提言したい。

## 参考文献

斎藤 泰「大学教育における『文献講読』の効用—ヨーロッパ史理解への試み—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第24号，2002年。

同 「大学教育におけるヨーロッパ史」『秋大史学』第50号，2004年。

佐藤暢雄「抄録：秋田大学における35年」『秋田英語英文学』第46号，2004年。

※なお、専門教育の「ヨーロッパ史文献講読」も含む「イギリス史文献講読」については、2004年度教育実践経過報告を、教育文化学部国際言語文化課程欧米文化選修「斎藤研究室のHP」(<http://cube.ed.akita-u.ac.jp/staff/ysaito/index.html>)と、『西洋史』第16号，2005年2月，に公表している。